

盡し、籠を引とり、元の如く杓子にてならし、蓋をして細火にて焚あげ、暫むし置、飯櫃にうつすべし。

此吹あがりたる時、火は半分に減じたくべし、この湯を取盡したる時、薪はちろくに燃し、すぐに引盡し、燠ばかりにして暫くむし置也、又右のごとく湯はくみ取事なれば、常たく水かけんより倍入てよろし、扱箇様ニして焚たる飯は、至てかろく少しもねばり氣なければ、かけ汁又はとろゝにて食するは妙々なり。

〔守貞漫稿後集一〕飯

鄙テ麥ヲ交ユ、或ハ半粳半麥、或麥七分粳三分、其他分量不同也、又麥ニ全麥ト割麥ト二種アリ、曰ヲ以テ曳割タルヲヒキワリムギ、略テワリトモ云、全麥ヲ丸麥ト云、全麥ハ先ツ麥ヲ炊ギ、而後米ト合セ、炊カザレバ、熟炊ナラズ、故ニ割麥ヲ以テ、粳米トトモニ釜中ニ炊ギテ、一時ニ熟飯トナル、又三都ニテモ、往々麥飯ヲ用フルコトアリ、然レドモ食之ニ麥交食ノミヲ食スル者稀ニシテ、多クハ薯蕷ヲ摺リ、汁ヲ合セトロ、ト云テ、麥飯ノ上ニ加之ヘ食ス、加之者又專ラアブリ青海苔ヲ揉ミ粉トシテ加之、シカラザレバ、鯉節ノ煮出シ汁ヲカケ食ス、煮出シ汁ニハ、紫海苔、大根卸シヲ加之、其他陳皮、胡菽等種々加之、○中略

又三都ハ節分ノ日等、恒例トシテ食之也、食之ニハトロ、及ダシ汁ヲ用フ、或ハ當日及ビ平生モ素麥飯ヲ好ミ、或ハ養生ノ爲ニ、三都中ニモ食之人無キニハ非ズ、

〔空穂物語 藤原の君〕みつあしのだい、うらぐろのつき、しらしにむぎのおものませたり、

〔古今著聞集十六〕興言利口、妙音院入道殿○藤原師長仰らるべき事有て、孝道朝臣のわか、りける時、けふたがはで祇候すべきよし仰ふくめられたりけるに、孝道仰を承ながらうせにけり、ひめもすあそびありきて、夕部に歸り参じたりければ、入道殿大きにいからせ給ひて、御勘發のあまりに、贊